

図書館報 みかづら

和歌山県立医科大学図書館三葛館

目次

小さな危険?見つけた-----	1	“当たり前”のありがたさ-----	6
図書館とは.....	2	文献検索でお困りのことはありませんか?-----	6
文献と対話する-----	3	葉のテーマ-----	7
本嫌い克服の第一歩-----	4	平成18年度三葛館活動記録-----	8
新たな自分の発見-----	4	平成18年度利用統計-----	8
生活の中の読書-----	5	編集後記-----	8

小さな危険?見つけた

保健看護学部 事務室長 江川 栄 治

私がこちらの大学に来たのは、2年前の4月。最初に、このような施設に置かなければならない防火管理者の仕事を誰がするかということがありました。私は、以前防火管理者の研修を受けていたので、私がその仕事をする事としました。

早速、学校では当然「消防訓練」をしているものと思い聞いて見ますと、一度も訓練をしたことがないとの返事。学校で火災などが起こったときに、誰がどのような動きをして、学生さんをどこに逃がし、消防署には誰がどのような内容を通報するかなどをまとめたマニュアル作りをまず行ないました。その次に、マニュアルどおりに動けるように訓練をしなければなりません。一度もしたことがありませんでしたから、学内での説明、合意、訓練の際に助言をもらうために消防署との打ち合わせ、学校の行事との調整、対象は全学年合同での訓練の実施は、授業の状況からできませんから、1年次生のみを対象に毎年訓練を実施していくこととして、訓練ができたのは10月になっていました。本年度も継続して実施しています。皆さんに遅まきながらも避難場所がどこか、避難経路はどうなっているのか、消火器の使用方法はどうかなどを知ってもらい、ひとつの安心になりました。

2年目の春には、地域の方から、学生さんの交通マナーが非常に悪いとの苦情が、舞い込むようになりました。特に今年が悪いというわけではなかったのですが、だんだん地域の方々にも保健看護学部の学生さんの存在が、良い意味でも悪い意味でも目を引くようになってきたからだと思っています。

そこで朝、交差点のところに立って、交通事故などが起こらないように誘導などを行うこととしました。これだけでは目の行き届く範囲が限られていますので、警察署の方に来てもらって「交通安全教室」を開き、1年・2年次生に話を聞いてもらいました。その後マナーは、少しは向上したように見受けられます。引き続き、皆さんにもご自分で心がけていただきたいと思います。

そのほかにも、図書館棟から体育館への通路に段差がありますが、境目のタイルの色の明暗がわかりにくく、段差がないものと思って歩いてしまい、足をくじきそうになりましたので、タイルの色を変えて、「段差があることをわかりやすく」することもしました。皆さんは、変化に気付いていたでしょうか。

これらのことは、行わなくても今まで済んでしまいましたが、これからは何か起こる可能性は非常に小さなことでしょう。しかし、小さな危険を発見した際には、それを直していくことが、大きな事故になることを防ぎ、あるいは事故が起こってもより小さな事故ですむと考えています。

学生の皆さんもお仕事についたときには、体の動かせない人、言葉を発せられない状況の人、目や耳の不自由な人、状況のわからない小さな子供などを相手に仕事をする事となるのでしょうから、昔から「転ばぬ先の杖」ということも言われますが、何が危険につながるかを知って（情報の収集が必要です）、気をつけてあげてください。

以上、大学に来てからの、小さな危険？見つけた、でした。

図書館とは・・

保健看護学部 講師 石澤 美保子

皆さん、こんにちは。基礎看護学講座の石澤です。今回は「図書館とは・・」というテーマで少しお話しをさせていただきます。

こちらに私が着任して最初に感じたのは、図書館がとても近いことです。大学によっては「同じ敷地内」といっても2、3分(遠ければ5分以上)はかかることがあります。三葛館は「すぐそこ」というありがたい条件にあります。しかも、蔵書がとても充実している印象を受けます。保健看護学部の学生にとっては、この4年間は図書館に近づく絶好のチャンスだなと感じました。これからの看護師は、進歩する看護学や医学に敏感に反応し、学んでいかなければ、とり残されます。そのために、若いうちから「疑問を調べる」、「信頼性の高い新しい情報を得る」クセをつけるために図書館に行く必要があります。

さて、図書館は私にとってとても不思議な空間です。図書館の中に一步入ると何ともいえない本の香りを感じ、「ああ、図書館の匂い」と毎回癒されます。でも教員となった今の図書館はというと、落ち着いた空気に包まれる空間であることには違いないのですが、でも心の中では何となく文献探しにやっきになっているあせりの気持ちと、図書館の静の空気とのコントラストが不思議に思える場所、というのが本音です。

皆さんはどんな思いで図書館に来られているのでしょうか。試験前の勉強のためですか？演習や実習前の予習でせっぱ詰まった状態で来られたのですか？それぞれのいろんな思いが詰まった図書館だと思えますが、ぜひ図書館と大の仲良しになって、これからはいろんな学びを得ていただきたいと思います。

文献と対話する

保健看護学部 助教 今堀陽子

皆さん、いかがお過ごしですか。私は今年ようやく滋賀から人生初の県外進出を果たし、今、和歌山をたっぷりと満喫しております。

現在は、主に、急性期看護実習を通して学生さんに関わらせていただいております。今年の3月まで、消化器外科で看護師として働いておりましたので、看護師ではない立場で病棟にいるのが不思議な感じでした。しかし、学生さんたちと関わる中で、看護を言葉に、あるいは文章にしていくことの素晴らしさや楽しさを日々感じております。

看護とは実践の科学であると言われますが、科学的根拠が実証されていないことがまだ多く、学問として確立しているとは言いがたいと思います。臨床の看護師さんたちが真面目に精一杯頑張っているわりに、諸外国と比べても社会的地位は意外と高くなく、専門職と言われながらも、厳密には“準専門職”に位置づけられているのが現状です。看護の専門性に対する社会からのニーズが高まっているにも関わらず、“準専門職”に甘んじていることに心苦しさを感じます。看護が真の専門職と認められるためには、看護学が科学的根拠のある学問として確立されなければなりません。その任を果たすのは、看護学を学び、追究している我々であると思っております。

大学院生時代、研究活動を通して、“文献と対話する”ということ学びました。論文を読んでも何の意見も持てなかった私に、ある先生が「文献検討とは文献と対話することだ」と助言してくださったのです。それから多くの本を読み、知識を深め、自分の意見を持てるようになっていきました。やがて、「そうそう、私もそう思う。」と思えることもあれば、「いや、そんなことないよ。」と批判が出てきたり、「あれ？ そうだったの？」、「こんな考え方もあるんだ。」と新たな発見をすることが増えてきました。そして、きまって、まだまだ私の考えは浅いのだと思い知らされ、研究への意欲がかきたてられました。研究の方向性に行き詰まった際に本を読んで感じた、あのパーッと目の前が開けていった感覚は今でも忘れられません。元来私は、読書はあまり得意ではありませんでしたが、本を読み終えた時の充実感や満足感がすっかり病みつきになりました。“文献と対話する”—これは今でも私の心に残っている名言です。

学問を追究していく者にとって、本は一生付き合っていくパートナーです。本とより強い信頼関係を結び、本との一期一会を大切にしていきたいと思っております。



本嫌い克服の第一歩

保健看護学部 助教 岡本 光代

今年度4月より保健看護学部で勤務させていただき10ヶ月が経過しました。そして三葛館にはどれだけ足を運んでいるだろうかと振り返ってみると、指折り数えられるだけで、本から遠のいている自分に気づき反省しています。これまで、市町村で保健師として9年間働いてきましたが、日々の忙しさに甘えて“本を読んで学習する”ということから随分離れていたように思います。特に活字が苦手な私でしたので…。三葛館では、私とは違い、多くの学生さんが本を積み上げて、一生懸命学習していて、脱帽です。「私もがんばらなくては」と学生の皆さんからいつも元気を頂ける場所でもあります。

さて、本嫌いの私ではありますが、専門雑誌や学会発表論文などにはできるだけ目を通すようにしています。そこから新たな発見があり、自分の今までの知識や視野の狭さに気づくことができるので、専門書をもう少し読んでみようという気持ちになります。これは、本嫌い克服のための大きな第一歩です。そのほかにも、同じようにがんばっている仲間の報告によって励まされたり、行き詰った仕事のヒントになることもたくさんあります。不思議と自分が読みたいと思った本の活字は、幾分脳に届きやすいものですね。

看護職に必要な姿勢として、相手の気持ちや価値観を尊重することが大切です。このことは、多くの人に出会い、感動的な体験をすることによって磨かれていくものだと思います。でも、一生のうちに出会えるのはほんの一握りの人でしょう。そこで、私は本嫌い克服の第二歩目として、体験記や手記の類を手にとってみようと思います。本を通じて日本中、世界中の人と出会い、感動体験を積み重ねて、看護者、教育者として、その前に人間としてもっと深みのある感性豊かな人になろうという気持ちが湧いてきました。

こうして学べる環境に自分が居られるのは本当に幸せなことです。学生の皆さんと一緒に、たくさんの本やたくさんの人と出会い、お互いに高め合えればと思っています。

新たな自分の発見

保健看護学部 助教 土橋 まどか

小学生になると、両親はシリーズになっている本の中から一月に1冊ずつお小遣い代わりに買ってくれるようになった。ジャンルは、名探偵シリーズだったり古典文学全集だったり、様々だったが、次はどんな本が届くのだろうと、わくわくしながら待ち、そのシリーズが終わってしまうと、とても寂しい気持ちになったのを覚えている。今でも、本の「続き」を待つ楽しみが忘れられず、長編や続編のある本を買うことが多い。本には、人の生きる過程や考えが凝縮されている。現実では、信頼関係を構築し、長い時間かかるものが、本の中では簡単に知ることができるのである。

印象に残っている本を思い出すと、大学時代に読んだ『ロリの静かな部屋』がある。著者のロリが統合失調症にかかった経験をさかのぼり、日記として綴ったものである。家族や友人、また医療関係者の

証言も交えてあり、外から見てロリがどのようなようだったのかも知ることができる。病によって、とてつもなく大きな心の闇を抱え、その闇の暗さや恐ろしさがロリの心情として、緻密に描かれており、それでも懸命に生きようとする姿に衝撃を受けた。最後の章に、ロリが自分の幻聴体験を郵便配達員に話す場面がある。そこで、彼は、いろんな声が聞こえることについて「すごい」と賛嘆する。彼にとって、ロリは病人ではなく声が聞こえる個性を持った人なのだ。そしてロリは、自分の人生を振り返ってみて、発病する前の自分に戻りたくないと断言する。多くの人に助けられ、人生をやり直すチャンスであったからと。私は、この本から先入観にとらわれず「純粹に、ありのままに」相手を理解することの意味を教わった。

100人いれば100通りの生き方があるように、みんな必ず自分とは違う歴史や物語を持っている。私は、これからもたくさんの本、そしてたくさんの人と出会い、新たな自分を発見していきたい。

生活の中の読書

保健看護学部 助教 尾崎 倫子

幼い頃、母はよく本を読み聞かせてくれたそうで、そのおかげか文字を覚えるのが早く、気づいたら自分で読むようになっていたそうです。その頃のことは覚えていませんが、どうやら私の本好きはこの頃からのようです。

図書館に通い出したのはおそらく小学校低学年の頃と記憶しています。学校の図書の時間と、唯一の休みである日曜日に家族で図書館に行くこと、私はこれらをすごく楽しみにしていました。「本」のない生活など想像もつかないくらい、私にとって「読書」は特別なことでなく生活の一部でしたし、今でもそれは変わっていません。

読むジャンルはいろいろで、その時々で気になる本を手に取ります。ストーリーの展開を楽しんだり、作者の目を通して新しい考え方や世界を知ったりと得られるものもいろいろです。毎日の生活や経験からだけでは得られない何かを「本」は与えてくれると思います。

通常なら読んで感動した本などを紹介するのですが、この依頼をいただいてから、ふと「あの人の書いた本はあるのだろうか」と思って調べてみて見つけた、これから読んでみたい本をご紹介します。坂村真民著「坂村真民一日一言：人生の詩、一念の言葉」です。この中の一つの詩に「二度とない人生だから」というものがあります。「二度とない人生だから 一輪の花にも無限の愛をそいでゆこう 一羽の鳥の声にも無心の耳をかたむけてゆこう」で始まる詩で、私が幼稚園の年長の時に、発表会で暗唱したものです。子ども心に感銘を受け、二十数年たった今でも心に残っていて大切にしている言葉です。今回調べるまで作者の名前も知らずにいましたが、他の詩も含めてじっくり読んでみることで、また新たな気づきがあるのではないかと思います。皆さんも小さな頃に興味のあったことを振り返ってみると視野が広がってくるかもしれません。

生活の中の一服の清涼剤であり、知的好奇心を満たしてくれる「読書」をぜひ生活の中に取り入れてください。

“当たり前”のありがたさ

保健看護学部 1年次生 沼田 有可里 野尻 純子

今回この図書館報に執筆させていただくことになったのは、自主カリキュラムの発表を見てくださっていた司書の志茂さんにお誘いを受けたからです。せっかくだからこそ、この場をお借りして、私たちが自主カリキュラムで考えたことを皆さんに伝えたいと思います。

私たちは、一年生の夏休みを利用して、自主カリキュラムで夕張に行ってきました。財政破綻した夕張から、将来破綻する可能性が危惧されている和歌山の明日を考えられるのではないかと考えたからです。夕張では、市立図書館が閉鎖されるなど、子どもたちを取り巻く教育環境が悪化していました。現在、主婦が立ち上がり、本の読み聞かせなどを行っています。市の破綻が、子どもたちが本に触れる機会を奪うことになり、教育格差の問題を生んでいました。“当たり前”だと思っていたことが、夕張では当たり前ではありませんでした。

それは、私たちの大学の教育環境について考えさせられるきっかけとなりました。私たちにはすぐ使えるきれいな図書館があり、簡単に本に触れることができます。図書館が誰にでも快適に利用できるのは、その環境を整え、私たちの学習を支えてくれる人たちがいるからです。夕張に行って、普段の“当たり前”がどれだけの人に支えられていて、貴重なものなのかが実感できました。準備の段階から分からないことを一緒になって調べてくれた図書館員さんや事務員さん。夕張に行くきっかけを作ってくれ、アドバイスを与えてくれた森岡先生。遅くまで一緒に残って手伝ってくれた服部先生。熱い言葉で励ましてくれ、優しい言葉をかけてくれた西村先生を初めとする先生方。この大学には、忙しいはずなのに優しく接してくれる方々がいて、恵まれた環境で教育を受けられて幸せだなと思います。

そのほかにも、優しく協力的だった夕張の人たち。和歌山市役所の人。本当にいろいろな人にお世話になりました。やってみて、いろいろな知識や情報が必要で、とても自分たちの力だけではできない、と何度も思いました。そんな時、この大学には“当たり前”のように一緒に考えてくれる方々がいます。助かりました。みなさんも、困ったことがあったら、ためしに図書館の窓口や事務室、先生方に相談してみてくださいはいかがですか。

文献検索でお困りのことはありませんか？



図書館三葛館では、皆さんの文献検索のお手伝いをいたします。

保健看護研究（臨床看護研究）での研究テーマを設定するとき、研究の方法を考えると、研究結果について考察を行うときなどに必要な、文献の探し方について皆さんのテーマに合わせて必要なお手伝いをいたします。

三葛館カウンターでご相談ください。

葉のテーマ

保健看護学部 学生 **S@MRY**

初めまして。図書館三葛館学生・教職員参加企画第 1 弾「三葛館オリジナルしおり」の制作に携わらせて頂きました **S@MRY** と申します。細々とデザイナー活動をしながら看護学校にも通っています。私が誰か知っている方は、どうか他の人には秘密にしておいて下さい。なんか恥ずかしいので。

今回は、しおりを制作した時の苦労話などさせていただきます。このしおり制作の話を伺った時、「せっかく作るのだから洒落の利いた物を作らなければ」と思った私は、締め切りの前日までデザインに悩みました。“これ”といったデザインも無いまま、同学年の男の子 4 人に頼み込み、冬の寒い中、外に引っ張り出し、とりあえず彼らの写真だけ撮りました。家に帰ってからはパソコンと睨み合い、締め切り当日の朝 3 時まで写真を編集し、偉人とその人の言葉を選び、協力者 4 人と司書さんにしか教えていない秘密を盛り込み、やっと完成しました。子どもの頃から、ブロックやら粘土やら、何かを作るのが大好きだった私は、このしおりのデザインが完成した時、夜中の 3 時に、一人へらへらとほくそ笑みながらガッツポーズをしていました。「なかなか…エエ感じやん…これ」とか言いながら……。

そして数日後、印刷され、きちんとしおりになって再び私の手元に帰って来た時、私は自分の仕事の大きさに気付きました。自己満足で作ったしおりだったので、「こんなのでよかったのか」と、喜びと不安で複雑な気持ちでしたが、後々司書さんからしおりの評判を聞き、胸を撫で下ろすと同時に、ちょっと鼻高々にもなりました。自分が納得でき、そして周囲の人からも評価をいただける(?)作品ができて、非常に嬉しく思います。記念すべき「学生・教職員参加企画“第 1 弾”」ですしね。そして、この機会を与えてくださった司書さんにはとても感謝しています。デザイナー兼看護師として頑張っていく自信が付きました。

皆さんもぜひ図書館に通い、看護だけではなく、自分の新たな可能性を模索してみてください。

これらの 5 種類に教員デザインの 1 種類を加えて 6 種類の三葛館オリジナルしおりを作成しました。



貸出のときにお渡しする返却期限票を 10 枚集めたり、三葛館が関わる図書館オリエンテーションや文献検索講習会に出席したりするともらえます。マイライブラリの登録時にお渡ししたり、マイライブラリ登録者へのお知らせメールに引換券が付くこともあります。皆さんも集めてみてはいかがでしょうか？

平成18年度（2006年度）三葛館活動記録

- 4月12日 新入生オリエンテーション
- 4月22日 日本看護図書館協会第16回総会（東京慈恵会医科大学）
- 4月26日 第1回保健看護学部図書委員会
- 6月2日 保健看護学部3年生「保健看護研究Ⅰ」文献検索指導
- 6月5日 県立高等看護学院助産学科文献検索演習（本学）
- 6月9日 保健看護学部3年生「保健看護研究Ⅰ」文献検索指導
- 6月26日 附属病院看護師第1回文献検索講習会
- 7月4日 附属病院看護師第2回文献検索講習会
- 7月12日 附属病院看護師第3回文献検索講習会
- 7月18日 附属病院看護師第4回文献検索講習会
- 7月20日 株式会社リコー図書館システムユーザー会（スイスホテル南海大阪）
- 7月21日 県立高等看護学院第2看護学科文献検索演習（本学）
- 7月24日 県立高等看護学院第2看護学科文献検索演習（本学）
- 7月28日 第2回保健看護学部図書委員会
- 8月22日 第3回保健看護学部図書委員会
- 8月23～25日 国立情報学研究所 NACSIS-CAT 目録システム講習会（大阪市立大学）
- 8月30日 附属病院看護師第5回文献検索講習会
- 9月5日 附属病院看護師第6回文献検索講習会
- 9月13日 附属病院看護師第7回文献検索講習会
- 9月27日 第4回保健看護学部図書委員会
- 10月28日 日本看護図書館協会第36回研究会（東海アクシス看護専門学校：静岡）
- 11月2日 第6回図書館システム導入打ち合わせ
- 11月21～22日 第8回図書館総合展（パシフィコ横浜）
- 12月4日 第5回保健看護学部図書委員会
- 1月10日 株式会社リコー図書館システム導入事例取材（本学）

平成18年度利用統計

年間開館日数	236日
入館者数	31,377人 (1日平均 133人)
貸出人数	5,211人
図書貸出冊数	12,751冊
視聴覚資料貸出関数	387巻
相互利用依頼件数	493件
学外利用者数	937人

編集後記

本誌は、本学が発行している逐次刊行物の中でも、教職員や学生が自らの考えや情報を比較的フランクに発信できる数少ない刊行物の1つであると思います。執筆者の皆さんの様々な考え方やその人らしさを垣間見ることができ、その方が少し近くに感じることができる貴重な媒体であると自負しています。

執筆者の皆様にはお忙しいところ、三葛館のためにご寄稿いただき感謝しております。どうもありがとうございました。

~~~~~

平成20年1月31日発行  
 図書館報 みかづら（第11号）  
 発行 和歌山県立医科大学図書館三葛館  
 〒641-0011 和歌山市三葛 580 番地  
 TEL (073) 447-2300（代表）  
 (073) 446-6721（三葛館）  
 FAX (073) 446-6730（三葛館）

~~~~~